

1. はじめに

イツハク・カツェネルソンという、ポーランドで活躍していた詩人・戯曲家のことをお話ししたいと思います。

私は、本来はドイツ思想、特にユダヤ系のドイツ思想を中心に研究しています。アドルノ、ベンヤミンなどを軸にしたフランクフルト学派の研究がメインです。それ以外にも、日本語で書いた詩人、石原吉郎^{※1}であるとか、金時鐘^{※2}さんについても本を書いてきました。そういう研究をしてきたのですが、この25年間ぐらいでいうと実は、それらを全部やってきた時間と同じくらい、イツハク・カツェネルソンに力を注いできました。ですけれども、なかなかそれを具体的な研究成果としては発表できないままでした。

一つは、『滅ぼされたユダヤの民の歌』という彼の代表作を共訳で出しました。それから、『ワルシャワ・ゲットー詩集』。ワルシャワ・ゲットー^{※5}で彼が書いた長篇詩を中心にして編んだものです。「ワルシャワ・ゲットー詩集」という詩集がカツェネルソンにあるわけではないです。ゲットー^{※6}作品を私が編集して訳したものです。これらはいずれもイディッシュ語^{※7}で書かれた作品でした。

ずいぶん前に『ポップミュージックで社会科』という本の中でも書いたのですが、もともと私がカツェネルソンに興味を持ったのは、なつかしい「ドナドナ」の歌をきっかけにしてでした。イディッシュ語バージョンの「ドナドナ」が入っているCDのドイツ語解説に、カツェネルソンがその歌の作詞家という紹介がしてあったのです。まず言っておきますと、これは間違っています。ただ、なぜそういう間違いがいまだにそのCDの解説に書いてあるかという、カツェネルソンのイディッシュ語やヘブライ語の詩には割と曲がつけられていて、歌われているものも多いわけです。私は実際にカツェネルソンの歌として歌われているのはあまり聞いたことがなかったのですが、おそらく今だったらYouTubeで探せば出てくるのではないかと思います。つまり、イディッシュ語でよく歌われる歌だからカツェネルソンが作詞者だろうという、いささか安直な発想があったので

はないかと思います。

そういう形で最初は、ドナドナの作詞家と勘違いして、それでカツェネルソンに私は深入りしました。すぐにドナドナの作詞家ではないと分かったのですが、分かったときにはもうずいぶんカツェネルソンのことを深く知っていましたから、やはりきちんとやりたいなと思って、それで『滅ぼされたユダヤの民の歌』と一緒に訳していきました。1995年、阪神・淡路大震災の年からイディッシュ語の勉強を始めて、99年に『滅ぼされたユダヤの民の歌』を出すことができました。この作品については、あとですこし詳しく紹介します。

カツェネルソンはワルシャワ・ゲットーで暮らす前には、ヘブライ語の作品もたくさん書いていました。ですから、カツェネルソンの全体像を捉えるためには、ヘブライ語作品を抜きにはできません。そこで10年ほど前から、私はヘブライ語の勉強もはじめました。

カツェネルソンが子ども向けにヘブライ語で書いた『夢においても目覚めにおいても——子どもたちのための物語集』という本が出ています。私はタイトルとしては簡略化して『夢と目覚め』という形で訳しています。自分に関わっている季刊で発行されている詩の雑誌があって、そこに少しずつ訳を今、連載しているところです。でも正直に言ってまだ読み切れていません。これは160ページぐらいのもので、130ページぐらいまでは何とか訳していますが、まだ訳しきれてない。ただその中で所謂シオニズムというのを思わせる作品がいくつかあるので、それを紹介しながらきょうはお話しできたらなと思います。シオニズムそのものというよりも、ホロコーストとカツェネルソンのシオニズムの関係みたいなものを確認するような話になるかと思います。

2. イツハク・カツェネルソン

あらためて紹介しておきますと、カツェネルソンは1886年にベラルーシのミンスクで生まれて、1944年にアウシュヴィッツで亡くなります。1886年というのは、日本^{※8}でいうと萩原朔太郎が生まれた年です。資料に

よって、生年を 1885 年としているものもありますし、87 年としているものもあります。カツェネルソンについて一番詳しい伝記のようなものは、妹さんが書いています。^{*9} 1948 年にブエノスアイレスで、イディッシュ語で出されている本です。その中で妹さんは、カツェネルソンの生まれたのを 1887 年としています。これはどういう齟齬なのか、ちょっとまだ分からないのですけれども。

彼が生まれたのはベラルーシのミンスク近郊のカレリチュ^{*10}という小さな町ですが、活躍した場所はポーランドのウッチです。戯曲家で、詩人で、小説も書き、批評家としても若い頃から活躍していた人です。ちょうど時代的にはヘブライ語が復活し、そしてシオニズムが盛んになっていく時代です。政治的にはもちろんロシア革命の時代でした。さっき言いました妹さんの伝記を読んでいると、本当にもうヘブライ語の復活の時代ですね。カツェネルソンは子どものときからヘブライ語で教育を受けて、ヘブライ語とイディッシュ語のバイリンガルで育ちました。シオニズムが盛んになっていく流れの中で、カツェネルソンは当然のごとく若い頃はロシア革命にも惹かれて、革命運動家たちの集まりにもだいたい参加していて、家族をヒヤヒヤさせていたというようなことも妹さんが書いてらっしゃいます。

カツェネルソンはヘブライ語とイディッシュ語で執筆していました。妹さんの本を読んでいると、カツェネルソンが 10 歳の時に書いた詩としてヘブライ語の作品「美しい鳥」が紹介されています。美しい鳥が窓のところにいて、少年がそれを見つけて窓に駆け寄るのだけれど、近づいたときにはもうその美しい鳥はどこかに飛んでいってしまっていたという、そういう詩です。ワルシャワ・ゲットーでカツェネルソンと一緒に活動する若い運動家で、イツハク・ツケルマンという人がいます。彼は映画の『ショア^{*11}』の最後にちらっと登場する証言者でもあります。分厚い回想録^{*12}が出されています。これは、ツケルマンが長時間にわたって喋っていたものを彼の死後テープ起こししたものですけれども、その中でかつてのカツェネルソンとの出会いについても語られていて、ツケルマンはカツェネルソンが 10 歳のときに書いたというヘブライ語の詩「美しい鳥」のことを話し

ています。カツェネルソンのあの詩がとても印象的だったと。どうやらカツェネルソンの「美しい鳥」は、ヘブライ語の初級教科書に載っているような詩で、言ってみれば、昔、日本語の教科書で「咲いた、咲いた、桜が咲いた」という詩が読まれたような、そんな感覚なのだと思います。美しい鳥が駆け寄るといなくなっているというのは、桜の歌よりはずいぶん意味深で、深読みすれば、今日お話しするカツェネルソンにとっての「シオニズム」と重なるところさえあります。10歳で書いたって本当かなと思うのですが、でもその詩がそのままツケルマンの回想録に出てくる。だからそれぐらい、ヘブライ語詩人として知られた人であったわけです。

1939年9月にドイツ軍がポーランドを急襲します。カツェネルソンはウッチのユダヤ人の指導者のような立場でしたから、ゲシュタポから逮捕状みたいなものが出ていたようです。それでまず彼は単身でワルシャワへ逃げます。そのときウッチでカツェネルソンはヘブライ部の学校も経営していたのですが、そこが接収されゲシュタポの司令部にされてしまったと言われています。やがて家族——妻と3人の息子——もワルシャワへ移住します。1941年11月にナチはワルシャワ・ゲットーを作ります。それからカツェネルソンはワルシャワ・ゲットーで著作活動と演劇活動を続けました。

1944年4月のゲットー蜂起の直前にカツェネルソンはゲットーの外に逃れていきます。それに先立って、ゲットーで暮らしているあいだに奥さんと下の子どもふたりを彼はトレ布林カの絶滅収容所に奪われていました。もうひとりツヴィという長男がいて、そのツヴィとともにフランスのヴィッテル収容所に運ばれて、その後ツヴィとともにアウシュヴィッツに送られ、即座に殺されます。

3. 『滅ぼされたユダヤの民の歌』

カツェネルソンが書き残した作品のなかでは、先ほど言いました、イディッシュ語で書かれた『滅ぼされたユダヤの民の歌』が一番有名です。彼はこの作品をフランスのヴィッテル収容所で書きました。ヴィッテル収

容所というのは当時、南米・中米で囚われていたドイツ人と交換する人員を集める場所でした。カツェネルソンが目指していたのは、ホンジュラス発行のパスポートを入手して、自分はもともとホンジュラス出身者だという名目のもとで中米のドイツ人と交換される、そういう筋書きでした。どこまでそれに現実味があったか分らないですし、そもそもナチス側にはパスポートを高額で買わせて、最後の金まで搾り取ろうという意図があったとも言われています。ともあれカツェネルソンは、そういうドイツの政策のもとでヴィッテル収容所にツヴィとともに入れられていました。ですから、ヴィッテル収容所は、ほかのナチの収容所や、ましてや絶滅収容所と比べるとあまり苛酷な状態ではなかった。それで、ヴィッテル収容所の中で彼はこの作品を書きます。

『滅ぼされたユダヤの民の歌』は各 15 連からなる 15 の歌で構成されていて、ワルシャワ・ゲットーからトレ布林カ絶滅収容所への移送を真正面から描いた大作です。各歌の末尾に日付が書き込まれていて、彼がこの作品を1943年10月3日ごろから書きはじめ、1944年1月18日に書き終えたことが分かります。カツェネルソンは各歌を1枚の紙に書き、合わせて15枚の紙片を壘に詰めてヴィッテル収容所の地中に埋めました。彼はアウシュヴィッツで虐殺されますが、ヴィッテル収容所が解放されたとき、作品が埋められていることを知っていたひとたちが地中から掘り起こし、この作品は文字どおり陽の目を見ることになりました。現在では、ヘブライ語、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ポーランド語等々に翻訳されている彼の文句なしに代表作ですが、それだけでなく、ホロコーストに関わる、世界でもっとも重要な作品の一つと呼べると私は考えています。

ちなみに、一昨年私は韓国に行ってシンポジウムで話をする機会があったのですが、そのとき韓国でもこの翻訳があることを知りました。その場で韓国語版を渡していただきました。ただし、その韓国語版はドイツ語訳からの重訳でした。ともあれ、そういう形でこの作品は世界的によく知られています。この作品に基づくシンフォニーも作られています。でもこれはワルシャワ・ゲットー以降の作品です。時代を遡る形で、次にゲットー時代の作品についてお話しします。

4. ワルシャワ・ゲットーでの作品

カツェネルソンのワルシャワ・ゲットー時代は彼がヴィッテル収容所に送られる前ですから、少し時間を遡ります。ワルシャワ・ゲットーで暮らす以前には、カツェネルソンはヘブライ語とイディッシュ語で書いていて、ヘブライ語での作品も多かったのですが、ワルシャワ・ゲットーではイディッシュ語の作品が中心になります。

彼はワルシャワ・ゲットーで最初は戯曲をたくさん書いていました。これはゲットーで、特に子どもたちと一緒に芝居を上演するためでした。私は2014年にイスラエル、ハイファ郊外にある「ゲットー戦士の家キブツ」を訪れた際、実際その当時カツェネルソンの芝居に出ていたというおばあさんと会い、インタビューをしたりしました。残念ながらもう亡くなってしまいましたが、ワルシャワ・ゲットーでのカツェネルソンの、いわば教え子でした。本当にワルシャワ・ゲットーでカツェネルソンの芝居に出ていた人がハイファの郊外のキブツでまだ生きてらっしゃるという、ちょっと信じられない思いでした。彼女の腕には「32291」という抑留者番号の入れ墨がうっすらとまだ残っていました。その人自身も回想録をヘブライ語で書かれていて、幸い英語版も出ているので読みました。^{※13}そこからは、カツェネルソンと彼女——ラバンさんというのですが——そのふたりの結びつきが強く感じられました。すこし寄り道になりますが、カツェネルソンとラバンさんについて、もうすこしお話ししておきます。

カツェネルソンはヴィッテルで『ヴィッテル日記』をヘブライ語で書いています。これは文字どおりの日記ですが、そのなかでラバンさんの思い出を彼も記しています。おそらくその時点では、カツェネルソンはラバンさんがもう生きていないだろうと思っていたのではないかと私は思います。ラバンさんはゲットーの青年運動の活動家のひとりとして各地のゲットーを旅する連絡係の役割を果たしていて、逮捕されています。彼女はアウシュヴィッツの第2収容所ビルケナウに送られますが、ユダヤ人ではないと言い張って、ポーランド人の政治犯としてアウシュヴィッツを生き延びます。そして、彼女は生き延びて、カツェネルソンの『ヴィッテル日記』を

読んで、カツェネルソンが自分のことを覚えていてくれたことを知るのです。

それにしても、ラバンさんがアウシュヴィッツに送られたのは1943年1月27日で、カツェネルソンはその1年4ヵ月後にツヴィとともにアウシュヴィッツに送られ、即座に殺されたわけですから、ふたりはアウシュヴィッツという場で再会する可能性のぎりぎりのところに置かれていたことにもなります。

ここで本題に戻りますと、ゲットーでの生活の悪化、とくに1941年6月22日の独ソ戦の勃発によって始まる悪化とともに、とても子どもたちと一緒に芝居をするような可能性がなくなってゆきます。それで、カツェネルソンは戯曲よりも長篇詩を中心に執筆していくことになります。

さて、戯曲の中の代表作「バビロンの河のほとりで」はバビロン捕囚をテーマにした4幕ものの大きな戯曲で、ワルシャワ・ゲットーで書かれて現存している作品としては一番大きな作品です。時代としては文字通りバビロン捕囚の時代です。ですから預言者エゼキエルなどが活躍します。エゼキエルそのひとが舞台に出てきて、走り回ったりしています。同時に、その中の登場人物たちに、ユダヤ人とキリスト教徒、あるいはシオニストとブンド^{※14}などを中心とした1940年前後当時のさまざまなイデオロギー的対立が窺われるような作品にもなっています。この登場人物はシオニストだとか、この登場人物はブンドだとか、あるいは同化主義者だとか、簡単には言えそうにないのですが、明らかにそういう問題、つまり当時のさまざまな立場のユダヤ人の論争が舞台に乘せられようとしていたと思います。これはイディッシュ語から訳して、今、私が代表をしている神戸・ユダヤ文化研究会の『ナマール』という機関誌に1年1幕、ですから4年かけて翻訳を載せています。

もう一つのゲットー時代の代表的戯曲として『ヨブ』があります。これはヨブ記に基づく3幕ものの芝居です。実際にヨブ記の記述に従いながらワルシャワ・ゲットーの状況を重ねていくような作品になっています。神を呪いなさいという妻の言葉がヨブ記には出てきますが、ここでは妻は悪魔が乗り移った人物として描かれています。芝居としては上演できなかったのですが、カツェネルソンはこの作品を聴衆の前で朗読はしたようで

す。当時ワルシャワ・ゲットーではいくつかのグループが地下活動を含めた文化活動を展開していました。先ほど名前を挙げましたイツハク・ツケルマンはその代表でしたが、彼が属していた「ドゥロール」（ヘブライ語で「自由・解放」）というグループは、地下出版物をいくつか出しています。この戯曲「ヨブ」はドゥロールの地下出版物として出版されてもいます。発行の日付は1941年6月22日、まさしく独ソ戦の勃発の当日となっています。これはもちろん偶然ですが、その出版祝いの日に独ソ戦の知らせが舞い込んだという記述がツケルマンの回想録には見られます。

長篇詩の代表作としては「ラヅインの男のための歌」があります。ラヅインというのは、ユダヤ人のコミュニティがあって、特にハシディズム^{※15}の盛んな街です。そのラヅイン出身のレッベがいわば主人公です。レッベというのはハシディズムのラビに相当する人物ですが、その人物を軸にしてルブリン・ゲットーの壊滅を主題としている作品です。三つの歌からなっているのですが、1連が20行、そして一つ一つの歌が20連からなっています。ですから全体で1200行を超える大作です。そのラヅイン出身のレッベはラヅインを逃れて今、ウウォダヴァという、やはりハシディズムの盛んな小さな町にこっそりと暮らしていました。彼はワルシャワに招聘されますが、同時にルブリン・ゲットーの壊滅の知らせを受けます。レッベはワルシャワへの招聘を拒み、ルブリン・ゲットーの死者たちの埋葬に向かいます。この作品は、ゲットー時代を代表する長篇詩として、私は『ワルシャワ・ゲットー詩集』に訳して収録しました。

それから、「1942年8月14日、私の大いなる不幸の日」という作品も重要です。1942年の7月22日にワルシャワ・ゲットーからトレ布林カへの移送が始まります。カツェネルソンの奥さんと下の息子ふたりも、8月14日にトレ布林カに運ばれてしまいます。タイトルにあるのはその日付です。これは2行を一連として238連の長篇になっています。ここでカツェネルソンは、妻とふたりの子どもに痛切に呼びかけています。家族のことをこれだけ直接にうたった作品は、それまでは見あたりません。およそ詩作というものの大事な柱として不在の者への呼びかけがあるのではないか、そういうことも感じさせてくれる作品です。こちらも『ワルシャワ・ゲットー詩集』に収録しています。

ちなみに「ラッツィンの男のための歌」は、1942年7月に始められて、1943年1月に完成ということですから、あいだにトレ布林カへの移送、しかも妻子の移送が挟まっています。トレ布林カへの移送が始まって、妻子までが奪われて、一旦執筆を停止して、それからすこし落ち着いてからもう一度書き継いで仕上げた作品です。おそらく世界的に見てもこんな作品は他にはそうないだろうと思います。さらに言うと、「ラッツィンの男のための歌」を仕上げる前に、あるいはそれと並行して「1942年8月14日、私の大いなる不幸の日」が書かれていたことになります。

5. ワルシャワ・ゲットー以前の作品

さらに遡ってワルシャワ・ゲットー以前の作品はどうかというと、これは先ほども言いましたように、イディッシュ語だけでなくヘブライ語の作品も多く書かれています。カツェネルソンの全著作リストというのも、そう簡単にここを見たらありますというものではない状態です。とくに戯曲の場合は冊子のような状態で何冊も出ていて、しかもワルシャワを中心にポーランドは第二次世界大戦中に大きな被害を受けていますから、図書館や博物館でも簡単に見つからない。作品リストは一から作らないと仕様がないような状態で、私もまだ分からない点が多いです。

017

主だったものを挙げますと、1909年に『カリカチュアー』と題されたイディッシュ語の3幕ものの戯曲が出ています。結構大きい戯曲で、若い頃の代表作といわれています。カツェネルソンは20代半ばですね。それから1910年に出版されている『薄明』。こちらは2巻もののヘブライ語詩集です。1922年には『預言者』。これはヘブライ語で書かれた3幕ものの戯曲です。この戯曲をカツェネルソン自身は、自分の中の大事な作品とみなしていたようです。それからカツェネルソンはハイネの詩が好きだったようで、1924年には『ハイネ詩集』を出版しています。ハイネの詩をドイツ語からヘブライ語に訳したものです。カツェネルソンはドイツ語もかなりできたのでしょうね。詩集として一番大きいものは1938年にヘブライ語版で全3巻の形で出ています（『詩集』）。ただしこれは1938年ですから、出版したものの、ほとんど流

通しなかったようです。多分今はもう世界的にもそんなに残ってないような状態だろうと思います。その他、彼は自分の劇団を持っていたから、劇団用に自分でヘブライ語とイディッシュ語の戯曲を多数書いていたようです。とくにヘブライ語の戯曲にはヘブライ語の復活・普及に資するという実際上の目的もありました。さっき言いましたように、ヘブライ語学校をウッチに設立して、家族で運営していたのがカツェネルソンでもありました。また彼は「ハビマー」(ヘブライ語で「舞台」)という劇団を作っていて、これで東ヨーロッパ、モスクワあたりにまで公演に行っていました。

この辺が一応、カツェネルソンの全体像になります。

6. 『夢においても、目覚めにおいても』

018 本当はこれ以降のことをもっと深くお話ししたかったのですが、実際に話そうとするとあまりたいしたことを言えないなと思ってしまいました。『夢においても、目覚めにおいても』というヘブライ語の子ども向けの作品集をこの間、読んでいます。これは1955年にイスラエルのテルアビブで出版されたことは確かです。ひょっとしたらカツェネルソンが生きているあいだにこういう本が出ていて、それを復刻したんじゃないかという可能性もあるのですが、この本自体にはそういうことが何も書かれてないので分かりません。編者とかも特にないです。ただし、これには挿絵がいくつか付いています。例えばこういうものですね。

この挿絵の作者はヨスル・ベルグナー。オーストリアのイディッシュ作家、メレフ・ラヴィッチの息子です。イスラエルで有名な



「イスラエルの宝物」



「ひと」

画家で、ウィキペディアで調べれば出てくるようなひとです。ベルグナーは1920年、ウィーンで生まれてワルシャワで育ったようです。さらに、1937年から48年までオーストラリアのメルボルンで過ごしていたということです。ちょうどホロコーストの時期はメルボルンにいて、2年後にイスラエルに移住したということです。1950年ぐらいですね。ですから、このベルグナーの挿絵は少なくとも1955年の出版に際して付されたものではないかと思います。

『夢においても、目覚めにおいても』には31編の子ども用の物語が収録されています。子ども用といっても、5、6歳ではなくて、やっぱり小学校高学年から中学生ぐらいですかね。短いものと1ページ、長いもので10ページ程度です。びっくりするのは、ゲットー以降の作品と比べると実にユーモラスな作品が多いということです。その作風からしてゲットー期以前に書かれたものであることは明らかだと思います。多くの作品でユダヤ教の風習、お祭りなどがモチーフになっています。つまり子どもたちにユダヤ教やユダヤ人の考え方を伝える、そういうことと同時にヘブライ語の学習を促すという目的があったのだろーと思います。実際、私自身がヘブライ語の学習のためにこれを読み始めたのですが、ニクダー（母音符号）がきちんと打ってあって、初めて学ぶ者にとって非常に読みやすいのです。子どもたちにヘブライ語の学習を促す目的も果たしていたそういう本が、私が今、ヘブライ語を学ぶための役割を果たしてくれているということです。

その中でカツェネルソンのシオニズムというものを強く感じさせる作品として、「イスラエルの地の宝物」^{※16}、「夢においても、目覚めにおいても」^{※17}、あるいは「ひと」^{※18}という作品を読みたいです。と思いました。

「イスラエルの地の宝物」は短い作品ですが、おばあさんが病気になっていて、そのおばあさんの病気がイスラエルの地、エレッツ・イスラエルからやってきたユダヤ人の持つラケルの墓の砂、それによって治るという話です。祈祷書と香料の箱に「エルサレム」という活字が書いてあったという場面があるのですが、そこも印象的です。短いものですから、実際に読んでみようと思います。

イスラエルの地の宝物

(1)

おばあさんが病気になりました。お父さんはお医者さんと呼ばうと思いましたが、おばあさんは反対しました。おばあさんはお父さんをベッドに呼んで、こう言いました。

「ユダヤ人がイスラエルの地からやって来たと聞きました。そのひとを招いてください。そのひとなら、私のところにやって来て、私の病気を治してくれます」

みんなは、イスラエルの地からやって来たユダヤ人を呼びました。夕方そのユダヤ人は私たちの家にやって来ました。そのとき私の家には、父、祖父、それによい隣人のラビ・ピネハスさん、ラビ・モーセさんがいました。そのユダヤ人が入ってきました。私たちは、おばあさんが眠りから目覚めるまですこし待ってほしい、とそのひとにお願いしました。イスラエルの地からやって来たユダヤ人は笑ってこう言いました。

「彼女に必要なのは私ではなく、私がイスラエルの地から私と一緒に持ってきたよい宝物です」

私たちは驚いて、腰をおろし、口を閉ざしましたが、すべての眼はこう言っていました。

「その宝物とはなんですか？」

(2)

そのユダヤ人は小さな袋を取り出し、それを手で揺すりました。「さあ、みなさんは、この小さな袋のなかにいったいなにが入っていると思いますか？」

私たちはその袋のなかになにが入っているか知っていましたが、黙っていました。すると、そのユダヤ人もすこし沈黙してから、こう叫びました。

「私たちの母、ラケルの墓から取ってきた、すこしの砂です！」

しかし、そのユダヤ人が彼の口からその言葉を発すると、私たちの眼はまん丸に大きく見開かれました。そのとき、そのユダヤ人は彼の鞆を開けて、そこから、ハヴダラの祈りのための美しい香料の箱と壮麗な祈祷書を取り出しました。その祈祷書のうえ、香料の箱のうえには、活字でまさしくこう書かれていました。「エルサレム」。私たちはそれを繰り返し見つめました、私たちの眼は見飽きるということがありませんでした。

(3)

しばらくして、おじいさんがこう言いました。

「どうやら、私のばあさんが眼を覚ましたようです。よきユダヤ人のかたよ、よろしければ、部屋へ寄っていただけませんか」

そのユダヤ人はこう答えました。

「はい、私はあなたがたにこう言いました。“彼女に必要なのは私ではなく、私がかの地から持ってきたよい宝物なのです”と。この砂からすこし取って、おばあさんの頭の下に置いてください。そして、この祈祷書であなたが祈り、この香料の箱で香りを嗅いでください。そうすれば、おばあさんの病気は治るでしょう」

そのようにそのひとは語り、そのとおりにみんなは行いました。

その後、おばあさんは1週間で病気が治りました。ほんのときおり、お医者さんがおばあさんのところにやって来ましたが、おばあさんはこう言います。

「お医者さまでも薬でもなく、イスラエルの地からの宝物、それこそが私の病気を治してくれたのです」

————— • ————— • —————

たいへん素朴といえば素朴な物語ですね。イスラエルの地、しかもラケルの墓から取ってきた砂がおばあさんの病気を治してくれる。「砂」というのは、しかし不思議ですね。甲子園の球児たちが負けたあと甲子園の砂を袋に詰めている、そんな姿も思い浮かんだりもしますが、「砂」は一方で大地と繋がっているとともに、その大地から剥がされて他の場所に運ば

れる。砂は散らばるディアスポラのイメージとも繋がっている。しかし、その「砂」が大量に集まればふたたび大地を造りだす……。

続いてとりあげる「夢においても、目覚めにおいても」は、この本のタイトルそのものになっている作品です。ここでは、幼いヨシフン——小学校低学年ぐらいでしょうか——のもとに、イスラエルの地、エレッツ・イスラエルからやってきた客が訪れ、その客からイスラエルの地の話を聞いたヨシフンが、その晩イスラエルの夢を見ます。翌朝その夢の内容を家族に語るのですが、そのとき客はまだそこにいて、その客がイスラエルの地はまさしくその通りだと語るという、そういう話です。

作品としては最後の「ひと」が一番よくできていると思うのですが、ちょっと長くて読めないのので、「夢においても、目覚めにおいても」をさらに読んでみようと思います。

夢においても、目覚めにおいても

022

(1)

お父さんが祈りの家からお客さんを一緒に連れてきました。シャバットのお客さんです。

幼いヨシフンはお客さんのほうを見ました。すると、その顔はひどく褐色に日焼けしていて、そのひとはヘブライ語を話します。

ヨシフンは小声でお父さんにたずねました。

「あのお客さんはどこから来たの？」

「あのかたはイスラエルの地からやって来たのだよ。エルサレムのひとだよ」

そのとき、ヨシフンは叫びました。「ああ、なぜあのひとがあんなに日焼けしているのか、なぜヘブライ語を話すのか、やっと分かった——あのひとは、私たちの地からやって来たんだ！」

(2)

みんながテーブルに腰かけて、食事をしていました。飲み物を飲ん

でいるときに、お父さんが幼いヨシフンに語りかけました。

「ヨシフン、シャバットの讃歌から、私たちに何か歌を歌ってくれないかい？」

ヨシフンは答えて言いました。

「まず、お客さんに、イスラエルの地について、私たちに話してもらおうよ」

お父さんは叫びました。

「ヨシフン、お前の言うことが確かにただし。お客さんに、祖先の地について、何か話していただこう」

お客さんは笑って、ヨシフンのほっぺを軽くつねって、かの地についての不思議な話を語りはじめました。

家族の全員が、そして彼らとともにヨシフンが、お客さんの言葉に、黙ってじっと耳を傾けていました。みんなの心臓はドキドキし、眼は大きく、大きく、見開かれていました。

ああ、これこそイスラエルの地なんだ——ヨシフンは心のなかで叫ぶと、椅子から立ち上がりました。

(3)

「ヨシフン、どこへ行くんだ、どこへ？」とお父さんが彼にたずねました。

「イスラエルの地へ行きます、歩いて行きます」

お母さんが笑って言いました。

「でも、あなたは道を知らないでしょう！」

「ぼくはすこし知っているよ！」とヨシフンは答えました。「東のはずれ！ 太陽の昇るところ、そこにこそイスラエルの地があるんだ」

家族のみんなが笑いましたが、お父さんはみんなを静かにさせて、こう言いました。

「お前はイスラエルの地へ歩いてゆく、それでは私たちは——近くの森へ行ってみよう。さあ、一緒に行こう！」

ヨシフンはうなずいて、みんな一緒に出かけました。

(4)

イスラエルの地は家から遠いところにありましたが、森も近くには

ありませんでした。

その森へみんなは向かってゆきました。みんなはくたびれて、木々の根元に腰をおろして休みました。

ヨシフンはさらに歩きたいと思って、お父さんにこう言いました。「お父さんもすこし休んで、それから先へゆくのでしょう？」

幼いヨシフンはみんなと一緒に腰をおろし、頭を母さんのおなかに乗せて、眠りこみました。

(5)

目を覚ますと、ヨシフンは自分の家のベッドにいました。ベッドから飛び降りて、顔を洗い、身支度を整えて、食堂に入りました。すると、家族全員が食卓について、朝ごはんを食べています。みんなが笑って、こう言いました。

「ヨシフン、どこから来たんだい、どこから？」

ヨシフンは答えて言いました。「みんなぼくに“シャローム”と言わなくちゃ。ぼくはイスラエルの地からやって来たんだよ！」

お父さんは笑って言いました。「なるほど、お前はベッドにいて、眠っていたんだ！」

それに答えてヨシフンは言いました。

「眠っていたのも本当だけど、夢を見てもいたんだ。その夢のなかで——ぼくはイスラエルの地にいたんだ。みんなが聞きたいなら、ぼくが見たもの、聞いたものをみんなに話すよ」

「みんな、聞きたいよ！ みんな、聞きたいよ！」

家族の全員が叫びました。そして、あのお客さん、エルサレムからやって来たあのひとも、聞きたがりました。

そこで、ヨシフンは語りはじめました。みんなじっと耳を傾けていました。家族の全員が、黙って、聴き入っていました。みんなの心臓はドキドキし、眼は大きく、大きく、見開かれました。ヨシフンが話し終えたとき、お客さんが叫びました。

「私は誓って言いますが、この子はまるでイスラエルの地からやって

来たかのように。夢であれ、目覚めた状態であれ、あれこそがイスラエルの地です」

————— • ————— • —————

こういう話なのですが、みなさん、どう思われたでしょうか。ある意味、これも典型的なシオニズムの物語というような感じにもなるかと思います。面白いのは、ここではイスラエルの地はどんな形で語られたかということが全くないんですね。イスラエルからの客の話にしても、ヨシフンが見た夢のなかのイスラエルも、具体的な話は全く登場しない。そのとおりだ、そのとおりだと頷きあっているのだけれど、具体的な記述はない。だから、こういうシオニズムは空虚だ、空疎だと言いたくなるのですが、まさしく「夢」とか「希望」にはそういう側面がありもするのですね。具体的に語るとその非現実性を実感せざるをえないのだけれど、具体的に語られないことによってかえって夢が掻きたてられる側面もある。カツェネルソンのこの作品も、そういう役割を果たしていた可能性は否定できないとも思います。

最後に「ひと」です。タイトルの「ひと」の原語は「アダム」ですが、ここでは雪だるまを指しています。寒いハヌカ祭の最初の夜に——ハヌカ祭^{※19}というのは、西暦では12月の中頃から後半にかけてです——、ベン・ツィヨン、愛称でベニーと呼ばれる子どもが雪だるまを作って、それにおじいさんの祈祷書を持たせる。そして、こちらに来てほしいというユダ・マカビへの伝言を頼むという話です。ユダ・マカビというのはハヌカ祭の起源となっている紀元前2世紀の愛国者です。ハヌカ祭は8日間続くわけですが、8日経ってもユダ・マカビはやってこない。しかし、イスラエルの地のマカビの墓にその祈祷書は届いていたという、そういう話です。

作品としては、僕は「ひと」が一番よくできていると思うんですが、長すぎて読むことができません。やりとりのところから最後までだけ、せっかくだから読んでみましょうか。ヨシフンは、ユダ・マカビに来てほしいというメッセージを「ひと」に託したんだという話をおじいさんにする。おじいさんは自分の祈祷書がなくなって困っているんですけども、ヨシフンの気持ちをよく理解している。そこでふたりしてユダ・マカビの到着を待っている、そういう場面からです。

「そのお前のひとはいつ帰るのだい？」

「いいえ、ぼくが待っているのはあのひとです。ユダ・マカビです、彼の到着をぼくは待っているんです」

「じゃあ、ベニー、マカビはいつやって来るんだい？」

「もうきょう、やって来ます！」

「ひょっとすると、きょうは来ないんじゃないかい？」

「つぎの日、ハヌカの3日目のろうそくのときにはやって来ます。明日か明後日か、それともハヌカの最後の日か。でも来るよ、きっと来るよ」

「ひょっとすると、ベニー、ハヌカの最後にも来ないんじゃないか？」

「それじゃ、また彼を待ちます」とベニーは強い気持ちで叫びました。

「ベニー、いつまで待つつもりだ？」

「メシアの来るときまでです！」

おじいさんは、身をかがめて、ベニーの頭に口づけをしました。「ベニー、すばらしい答えだ。待ちなさい、待ちなさい、彼を、待ちなさい！私も彼を待とう、ふたりで彼を待とう」

しーっ、気をつけて——このことを、家の誰もほかには知ってはいません。ベニーとおじいさんのあいだだけの話です。そして、ハヌカのろうそくに火をともし夜になるたびに、ベニーはしばらくのあいだ身を隠して、野原に行っては戻ってきました。彼は出たり入ったりして、最後には窓のところに立って、窓越しに、夜の闇を見つめ、じっと注意深く耳を澄ましていました。

家族の者たち——ほら、彼らは食卓に座って、レビバーを食べながら、話しにふけています。おじいさんだけが黙って座っています。おじいさんはときどき顔を窓のほうに向け、不意に、孫にたずねます。「どうだい、ベニー？　なあ？」

しかし、食卓についているひとは誰ひとり、おじいさんが何のことを言っているのか、分かりません。ベニーだけがそれを知っています。

そして、あなたたち、幼いひとたち、あなたたちが、あの「ひと」の最後はどうなったのか、知りたいと思うのは、当然のことでしょう。

さあ、あなたたちに私が語りましょう。ただし、つぎの条件を私はあなたたちにもとめます。つまり、このことはどうかベニーの耳には聞かせないでいただきたい、彼を悲しませないようにしてほしい、ということです。

あの「ひと」、彼は本当に歩いてゆきました、荒れた道をとおり、湖を渡って。彼は歩いてゆきました、荒野の道、海の道、都会の道、村の道を。彼はとうとうイスラエルの地にまで歩いていって、そこで溶けてしまいました。

イスラエルの地の太陽は最高に熱いのです。雪からできたひとは、その太陽の光に耐えられず、溶けてしまったのです。

とはいえ、彼はベニーから託されていた使命を果たしました。

その地に暮らすひとりのユダヤ人が、ある朝、ユダ・マカビの墓の横を通り過ぎたとき、盛り上がった土のうえに、小さくて分厚い祈祷書を見つけたのです。

こういう結びです。「ひと」はよくできている作品だと思います。やはりハスカ祭りの時期のポーランドは寒くて雪が降っていて、だから雪だるまを作ることでもある。でもその雪だるまは、イスラエルの地まで歩いていくと、気候風土が違うから溶けてしまう。そこには簡単には飛び越えられない断絶がある。でも一方で、雪だるまは溶けてしまうんだけど、祈祷書は届く。そういう微妙な位置であり、関係ですね。そのあたりがよく出ているような感じがします。そして、もちろん、ベニーの純粋な信仰心にはやはり祈祷書を届けるだけの力はそなわっているということでもある。そういうことを思わせてくれる作品です。

7. カツェネルソンのシオニズム

こういうところに明らかにカツェネルソンのシオニズムが見られるわけですが、それでも、ある意味では非常に素朴であったり、あるいは観念的であったりすることは否めないですね。とはいえ、カツェネルソンの父方の従弟

にパール・カツェネルソンがいて、1887年生まれですからカツェネルソンより若干年下にあたると思うのですが、死んだのは偶然同じ1944年です。イスラエルで心臓発作で亡くなっています。パール・カツェネルソンはシオニズム運動の代表のひとりで、シオニズム事典では必ず名前が出てきます。例えばハンナ・アーレントはパール・カツェネルソンのことを「崇拜すべき私の神様」なんて呼んでいるんですね。ゲルショム・ショーレムとの往文書簡の中で彼女はそういう言い方をしています。アーレントが当時勤めていた出版社、ショッケン・ブックスで、パール・カツェネルソンの文章を集めて本を出すという話があって、それでショーレムに彼女は相談しています。そのときにパール・カツェネルソンのことを自分は非常に尊敬していると言って、そういう言い方をしています。パール・カツェネルソンは政治的にはバイナショナリズムの立場ですね。ユダヤ人とアラブ人が一緒に一つの国家を作るという、そういう方向です。アーレントはそういう点でも、パール・カツェネルソンに共感していたんだろうと思います。

028

それからイツハク・カツェネルソン自身、少なくとも2回、1924年と34年にパレスチナに渡っています。妹さんの伝記の書き方では毎年のようにパレスチナに行っていたことになるのですが、他の資料で見ると1924年と34年の2回がよく紹介されています。

そういうカツェネルソンの、ある意味では非常に素朴なシオニズム、あくまで観念的なシオニズムというのがあったわけですが、『滅ぼされたユダヤの民の歌』の第15の歌「全ての後に」の中ではこんなふうに書かれています。

こんな風に、奴らは我々を殺戮した、ギリシアからノルウェー、モスクワの手前まで

——およそ700万人を

胎の中のユダヤ人の子どもは数字に入らない、妊娠した女たち、母親になる前の女たち、

数えられるのはそこまでだ

遠くはアメリカ、近くはイスラエルの地に、ユダヤ人が残っているな――

この子どもたちがこの世にいたことを忘れるな、忘れるな

まだ生まれもしないのに殺された彼ら、忘れるな、母親と共にその胎内
で窒息させられた彼らのことを^{※20}

こんな一節が出てきます。ここに登場する「遠くはアメリカ、近くはイスラエルの地に、ユダヤ人が残っているな」という言葉はいささかも希望には繋がっていないんですね。むしろ皮肉な意味合いを強く帯びていると言えます。『滅ぼされたユダヤの民の歌』を読む限り、カツェネルソンにとっては、東ヨーロッパにおけるユダヤ人の絶滅は、ユダヤ民族そのものの絶滅に等しかったという感じです。先ほど菅野さんの発表で、ディアス^{※21}ポラのいいところの一つに、ある地域でユダヤ人が殺されても別のところに残っているという可能性の話があったのですが、そちらの形での希望はもう一切ないですね。ホロコーストというのは少なくともそういう印象を与える大虐殺だった。

029

映画『ショア』の中に、ポーランド人のヤン・カルスキさんの証言が出てきます。ヤン・カルスキさんというのは当時ポーランド人の若い青年としてワルシャワ・ゲットーのユダヤ人のメッセージを世界中に伝えるという役割を背負ったひとです。カルスキさんはずっとそれまでその時期のことは一切沈黙していたようですが、映画『ショア』の中で、カメラの前で初めて自分のワルシャワ・ゲットー体験を語る。ブンドのリーダーとシオニストのリーダー、合わせてふたりが一緒になってカルスキさんにメッセージを託す。このふたりから託されたメッセージをいくつかカルスキさんは語るのですが、その中でユダヤ人指導者に対するメッセージとしてこういうメッセージを託されたと証言しています。

国際的なユダヤ人指導者がいますね。／彼らのできるだけ大勢と、連絡を取ってください。そして、次のように言ってください。／“あなた方は、ユダヤ人の指導者だ。あなた方の人民が、滅亡しようとしている。／ユダヤ人は、ひとりもいなくなるのだ。／そうなくなってしまっ

たとき、指導者がいったい何の役に立つというのか！”／／私たちふたりもまた、死ぬのです。／私たちは、逃げるつもりはありません、ここに残ります。／／ユダヤ人指導者たちには、ロンドンでも、どこでも、／重要な省庁に行って、／行動を要求してもらいたいものです。／拒否されたなら、／街に出て、街頭にすわり込み、／食物も飲物も断ってもらいたいものです。／死ぬまで、ハンガー・ストライキをつづけてもらいたいものです。／人類すべてが見守る中でです。／ひょっとして……、これなら、もしかすると、／世界の良心を揺り動かせるかもしれません！

※22

『ショア』というのは色々な問題を抱えている作品だと思いますけれども、シオニストのリーダーがワルシャワで最後にこう語っていたという証言も残してしまっているわけですね。少なくともワルシャワにいたシオニストのリーダーは最後の瞬間に、ユダヤ人指導者に対して、ユダヤ人がひとりもいなくなってしまうときにお前たちはどういう指導者なんだということを語っていた。そしてその証言をしたシオニストのリーダーもおそらくは死んでしまうわけです。シオニストのリーダーのほうの名前は分かりませんが、ブンドのリーダーのほうは、何度か言及しましたイツハク・ツケルマンの回想録に出てきます。それによると、レオン・ファイネルというクラコフ出身のブンドの古参活動家です。その箇所に付された注によると、ファイネルのほうはかろうじてホロコーストを生き延びて、解放後の1945年2月に癌で亡くなったということです。

ブンドとシオニストは延々論争し続け、喧嘩し続けた仲でした。ブンドはパレスチナに渡ってユダヤ人がアラブ人と仲良く暮らせるわけがないと言っていました。そんなことが可能ならどうしてヨーロッパでキリスト教徒と共存できないことがあるか。ヨーロッパでユダヤ人とキリスト教徒は現に何百年も共存してきたではないか、と。このブンドの主張が正しかったことは現在にいたるパレスチナの状況を見れば明らかです。ブンドの言うとおりとなりました。しかし、その際、シオニストたちはブンドに対してこう言い返しました。そんなことを言って、ヨーロッパに留まっている

とわれわれは絶滅させられるぞ、と。残念ながら、こちらの主張も正しかったことになりました。論争し合っていたブンドとシオニストの主張がともに正しかったことを歴史が実証してしまった。ここに大きな問題があります。そして、そのように対立していたブンドのリーダーとシオニストのリーダーが、最後にはふたりしてヤン・カルスキさんにあのような証言を託していたということが分かるわけです。

このヤン・カルスキさんに託されたメッセージが与える印象と、カツェネルソンの『滅ぼされたユダヤの民の歌』の中の「遠くはアメリカ、近くはイスラエルの地に、ユダヤ人が残っているな——この子どもたちがこの世にいたことを忘れるな、忘れるな」という言葉は非常に共振するものがある感じがします。さらに『滅ぼされたユダヤの民の歌』の最後はこんな風な言葉で結ばれます。

何としたことだろう、もう誰もいないのだ……かつては一つの民族があった、それがもうない……一つの民族があった、確かにあった、それが……もうない！

031

何て物語だろう、モーセ五書から始まって現在に至る……完璧な悲しみに満ちた物語、こんな見事に誰がいったい語れよう？

アマレク人の話から、彼らよりたちの悪いドイツ人までの物語……おお、遙かな空、広々とした大地、おお、大いなる海——

すぐには一致団結するな、この地上の悪人どもを、いましばらくは消し去るな、奴らの始末は奴ら自身に付けさせよう！

ここまでくると本当に海と空と大地しかないという、ユダヤ民族どころか人間が誰ひとりいないような話の世界になっているのですけれども、ここでも「かつては一つの民族があった、それがもうない……一つの民族があった、確かにあった、それが……もうない！」という言い方になっている。これは、「東ヨーロッパに」かつて一つの民族があったけど、「東ヨーロッパに」そういう民族がもうないという感じを超えてしまっていると思うんですね。

それで「ワタン」という話からすると、当たり前のようなことになりま
すけれども、ある種、観念的にシオニズムというのがカツェネルソンの中
にあったとしても、やはりその観念性というのはもう否定しようのないと
ころがあって、そしてこの『滅ぼされたユダヤの民の歌』になると、やは
り東ヨーロッパ、ウッチやワルシャワ、あるいはもうすこし小さなシュテー
トル^{※23}とか、普通にシナゴグがあってユダヤ人が商売しているごくごく当
たり前の日常の場、それが「ワタン」であるとしか言いようがない。それ
がもう本当に全く滅ぼされてしまったという感覚です。その中で生き残っ
ているユダヤ人、ユダヤ教徒が世界のどこかにいるとしても、そのこと自
体は何のよすがにもならないという感覚ですね。それが『ショア』の場面
と見事に照合したものとして私には感じられるわけです。

最初に言いましたようにカツェネルソンの全体像を描くのにはまだまだ、
特にヘブライ語の方の作品を私は十分には読みきれていません。でもこれ
ほど作風が一変してしまう作者も珍しいと思うんです。もちろん私は、ゲッ
トーに入ってしまったことが大きいし、ホロコーストで家族を奪われたこと
が大きいと思います。そういう点でも、大事な人だと思うんですね。だか
らその全体像を含めて、これから考えていけたらいいなと思っています。